

も作りて、文化十年の頃は、處々に是を學びて作り、遊觀の人群集したりしが、其後漸く衰へて止たり今はもとの花壇作りのみならず、彼種々の作り物は、費かゝる程利分なしとなり。

〔一話一言十六〕巢鴨菊

丁卯四年○文化の九月、節遅くして菊の花いまだひらかず、十月六日、白山本念寺なる母の墓にまうでしかへるさ、巢鴨五軒町の菊見にゆく、去年みし垣根の山茶花いかゞならんと問ふに、花すでに咲てかつちるもあり、先樹家權左衛門が園にいらりて、大菊をみる花壇四間計也、中菊もあり、花いまだ十分ならず、その隣に文次郎といへるあり、門に風流菊船作といへる標をたつ、入てみれば船の形につくりなせり花藤色小輪也、それより市左衛門が園に入てみれば、花又咲り、こゝには孔雀の羽をひろげたらんやうにつくれる二本あり、花いまだ遅し、小路を出て巢鴨の大路に出左の方なる彌三郎が園に入りてみる、去年みし西施白の花盛にして、蠟石もてきざみたる如し、花の中は黄色にうるみたるやうにみゆ、これは大村家より出し種にて、もとは漢種也とぞ、紫の中輪に一つむらぐづ、白き生つの入たるを、露のやどりと名づく、實生にして今年の新花なりと、彌三郎かたる、小菊のあざみ菊といへる、二もとを、ふさぐと大きくつくりなせり、一は白、一は紫也紫の方未

開三間の花壇の中に、たゞ一もとにて左右に二間半あまりひろごりて、山のかたちにつくりなせる黄赤カキイロ色の菊を、天真冠と名づく、これは去年の十月に苗を分てつくりたれば、十二月の培養の方によりて、かくはなれりといふ、なべての菊は、四月に苗をわかつて、九月まで六ヶ月の培養也、ごとしは十一月より根をわかつべきなどかたれり、存養の力のあつき事、これにてもみつべし、夫より東さまに歩みて、佐太郎が園にいる、これは今までみし花にくらぶべくもあらず、園の中よりはじめの市左衛門が庭に出て、もとのみちをかへれば、六日の月の影雲間にもれて、さやかなるを見つ、金曾木の里のやどりにかへりぬ。